もどかしい世界の上で

わろん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
もどかしい世界の上で

【Ｎコード】
Ｎ６３０１Ｇ

【作者名】
わろん

【あらすじ】
現在日本で社会問題になっているメンヘラー“ひきこもり”男性と、同じアパートに住んでいる“ＤＶ被害者”女性とのもどかしい関係を赤裸々に語って行くお話しです。

プロローグ（前書き）

独り語りやどうでもいい現状説明が多めで、個々人のセリフはかなり少なめですが、なにとぞお許しください。

プロローグ

うすらぼんやりしている狭い空間。

一人何時間も布団に入り横になって目をつむっている。そして今、眠りから覚め目を開けた。

俺は顔を横にして目覚まし時計を見た。［17：32分］

外の景色は夕焼けになって窓から見える木々を紅色に染めている。

今は日曜日（だったと思う）アパートの路地の方から子供のはしゃぎ声が心地良く聞こえてきた。

これからますます暗くなってあっというまに深夜になるであろう。いや、ならなかったら困る。

そして当たり前のように朝になって太陽が昇り、正午になり、また今窓を眺めている景色になり夜になる。

このサイクルを死ぬまで、永遠に経験しなくてはならないんだろう。生き物は。“どんな状態・状況”であろうとも。

時間は無情にも待ってくれないものだ。

今の俺の状況を簡単に説明すると　社会問題になっている真性の“ひきこもり”だ

それになったのは半年前　なる前は某ホテルのアルバイトを5か月ほどつづけていた。

丁度2か月目に入ると1人暮らしを経験したいという俺の意向を親はすんなりと許可してくれて実家のすぐ近く

詳しく説明すると実家から2ｋｍ区間にある六畳一間のアパートを借りてもらった。

もちろん家賃は俺持ち。食費も当然、俺持ち。

４か月を過ぎた頃、俺の持病がとうとう出てしまった。

アルバイトの身分ではあるが人間関係がとても酷になりつつあり、先輩や上司に自分のミスを酷く罵倒され

自分も自分で、注意されてもミスを繰り返すことに罪悪感を感じて、自分という人間がいかにちっぽけで　社会に対し使えなくて

情けなくて駄目人間だということを改めて実感し、自認してしまったわけだ。

だからますます自信を無くしてしまい、どうせ俺は駄目な人間なんだって自分を責め、日に日に仕事をすることが嫌になっていた。

そしていつぞやにやってはいけない無断欠勤をつづけ　かかってくる勤務先からの電話を無視しまくり

今の状況に至るわけだ。

新しいアルバイトを今後できるはずがなく　やめてからずっとニートのままだ。

・・ニートならまだいいかもしれない　外にでてるからな。

しかしひきこもりは　外さえ出なく　ずっと自室にひきこもっているのだ

ぐうたら生活もいいところか？　これもこれで案外しんどいと思う。

たとえば　家の外に出ることを禁じられたスポーツ少年を意識してもらいたい。

どうだ　苦痛だろ？

俺は体育会系ではないが、スポーツ全般は好きだし、球技ならやってみたい気もする。

だが今やこうやって常日頃病んでいる。外に出てみんなと戯れたいのに、それができない。

…メンヘラーもいいところだな。

そうまさに俺の持病、メンヘラー。

改善方法もあるっていえばある、その要素を治そうとする意欲があったらメンタルクリニックやら精神病院やらへ受診するし

なんだかんだ今の現状や将来の不安などなどをカウンセリングのおばちゃんに打ち明けたら心境はスッキリするかもしれないし、

医師から処方箋をもらい　時間をかけて持病を治していけるかもしれない。

だが　ひきこもりは、他の人々が普通にしている外出というごく当たり前な行為がとても怖いのだ。よってなかなか病院にたどりつけない。まさに今の俺だ。

ひきこもりにもいろいろ原因はあるが　具体的に何が原因なのか自分で自分を問い詰める。

他人の視線。

自意識過剰野郎というニュアンスにきこえてしまうかもしれないが、全然違う。

外に出たら、他人が俺を見下して笑っているような気がするんだ。

いや　ここ笑うところじゃねーぞ。病気だからな。

そして、それだけじゃない。

目にもしたくない　魔物に位置付けている“カップル”と出くわすのが一番嫌だ。俺はね。

なに、その幸せ自慢。　永遠の1人者の俺からしてみればとんだ嫌味だ。

嫉妬…　そんな風に片付けてもらってもいい。正直、すべてそれなのだから。

だけど　だけど　他人の幸せを根本から祝福できない俺だから、殺意を抱いてしまうのも当然。

こんな絵に描いたような人生最凶の構図の中でもしぶとくも生きているわけだから　こうやって普通に幸せにしているやつらを見るとどうしても　「なんで俺はこうじゃないんだ」　「なんでなんだっ」ってな感じになってしまう。

・・まぁ、これも俺が今悩んでいる　いや抱えている病気なのだから。

全世界の人間に問いただしてみても、これほどまでにカップルの糞野郎どもを嫌っているのは俺くらいなものだ。

「俺が糞野郎だな　ったく」

とりあえず　外に出たくない。

人の顔を見たくもないし、見られたくもない。

自分を他人と比べて劣等感を感じるのも嫌だ　他人の視線を浴び見

下されるのも嫌だ

だったら　自分だけの空間、部屋に閉じこもっているのがベストだ。

「くそばかやろー！！！！」　「っだあぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

そんなこんなを常日頃考え　過去に経験した恥ずかしいこと、嫌な思いをしたことを唐突に思い出し大声だして発狂している馬鹿な人物は

俺　内田雄一　２２歳　♂　ひきこもり歴1年3か月（蓄積含む）
彼女いない歴＝年齢　童貞

対人恐怖症、　ＰＴＳＤ、　虚言壁、　情緒不安定　　感情失禁（詳しい病名は不明）自意識過剰

２２歳の夏　蝉の鳴き声と子供のはしゃぎ声を聞きながら　俺はベッドから起きた。

1話　ひきこもりの日常

起きたのは夕方だが　俺はとりあえず今から活動を開始するわけだ。

ラジカセにアマゾンで取り寄せたアニメのキャラソンCDをかけ、PCのスイッチを入れる。

「♪♪♪　～♪♪♪～♪♪」

六畳一間の狭い空間にて　意味のわからない、もはや日本語がどうか不明の歌詞を、ロリっ気の混じった声で女の子が歌い、部屋中に響き渡る。

ひきこもりは毎度毎度、することがないのでアニメに没頭するしか時間を潰す道はないのだ。

最近では悲しいことに気に入ってるアニメ（萌え系・ほのぼの系）を完璧なほどに熟知している。

そう、俺は世間でバッシングされているオタクだ。　でもアニメは見ていると心が癒されてなんとなくだが落ち着くのだ。

オタクになりたかったのではなくなってしまったと言った方が正解。

アニメ観賞は精神安定剤の効果も含まれていると常々思う。

アニメ万歳！　萌え万歳！　ほのぼのゆるゆる系万歳！　オタク万歳！

部屋のど真ん中にドンと置いてある炬燵に足を入れ　ウィンドーズ画面の暗証番号を記入し立ち上げる。その間に鳴ってある音楽を消す。

ひきこもりにとって　パソコンは生きている糧なのだ　まさに生命線。

これがなかったら　今から東尋坊に行き　飛び降りられる自信がある。

生きていても楽しみがなかったら　つまらないからな。

人生趣味がなかったら味がないと言われているが　俺はその趣味こそネットサーフィンかアニメ鑑賞だ。

ＹＯＵＴＵＢＥを開発した人は本当に偉大だね。神様だ。ひきこもりの神様！

…ひきこもりの神様ってなんだ。

それは“鬱”くしい国、日本が創った社会構造になるのだな。

この持論だけは譲れない。

アパートのベランダには１週間分のゴミが無造作に積まれている。

半月ほど貯っぱなしにしてある。夏なんだし片付けないとそろそろ虫が湧いてくる頃合いだ。

だが俺は昼夜逆転しているせいか、ゴミ収集車がやって来る時間帯にはたいてい寝ている。

その時間に起きていることがリアルで難関な試練だ。

今度　頑張って起きてみるよ。できれば。

その日限りの食事であろう、冷蔵庫から冷凍してある食パンと取り出してトーストで解答しジャムをつけて食べる。

思ったより食パンは１枚でも結構、腹の足しになるのだ。それに６枚入りで値段は３００円前後。

これだと３００円で約一週間生きれるという単純計算になる。

日々仕事をし、活動をしている人なら到底足りないカロリーなのだろうが

１日１４時間寝ている俺には　十分であろうな。

ただ痩せていくことは必至だけど。

たまに近距離にある実家に帰って親が作ってくれた食事を食べるときがある。

最初で述べた通り俺が住んでいるアパートと実家の距離はかなり近い。

いっそのこと実家に帰ってしまえ、と掲示板で現状を明かしたときそのように散々書き込まれた。

しかし…そんなことをしたら親はたちまち仕事の話しを持ち出してくる。会ったときには常にな。

それにあの糞忌々しい兄貴と顔を合わせ一緒に暮らさなければならないのも尺だ。

・・・そりゃあ俺が鬱病だったら　親も納得するだろうし

何年ものの自宅療養も許してくれるだろう。

重度になったら国から認めてもらえ支援金がもらえるしな。

ただ今の俺はひきこもりなだけで、社会的に仕事ができないという状況ではない。

だから俺の親はタイムズ（週刊ワーク情報）を嫌味ったらしく俺の前に突き出してくる。

「あぁ、考えとくよ」とその場をしのぎ　食事がすんだらすぐ実家からアパートへカムバック。

安全地帯のアパートの自室へ引き返す。こんな感じのやりとりが３０回程度つづいていると思われるね。…数えてないけど。

…１人なったときに（自分の部屋とか風呂とか）過去を思い出すやいなや

「ばっきゃろーー！！　死ねーー！！あぁぁぁ！！」

と、唐突に叫んでしまう病気があるだろうか。ＰＴＳＤでもちょっと違うよな。

単に情緒不安定で感情を抑える能力が人より欠けているだけなのだろうが・・・。

しかしそんなこんなで、国から支援金をもらえるような重度の精神的な病気にかかってない。

メンヘラーっていうのも俺の自称だから、実際傍から見たら親に甘えている心の狭い人間。と思われても否定はできない。

正直に言うと、仕事以外のことなら、人に引っ張ってもらいながら外での遊戯に勤しむことははできるし、

深夜にコンビニにも行くことができる。

だからよっぽど重い重い精神病を抱えてない限り、“一般人”として社会から捉えられてしまう。

よって俺は仕事をしなくてはならないのだ。国の義務でもあるのだから。

だが・・・　嫌だ。

人間関係が怖い。　人と接するのが怖い。　孤立するのが怖い。

仕事を・・・　したくない。

・・・・・。

…俺は何回も何周もしたＹＯＵＴＵＢＥにアップしてある某アニメをいまだ鑑賞している。

「あぁ～　レイナちゃんは今日もかわいい声を出すよなぁ～…。」

「うぅ～　ケンジ君はかっこいいなぁ～　俺もこんなイケメンなら学生時代モテただろうなぁ。」

「あぁ～　なんで俺　こんなんなっちまったんだろう…。　どこで間違えたんだろう…。　あぁ～～」

いつもこんな感じだ。

どこの場面で、何話で、主人公やヒロインがどんな言葉を使っているのか、どんな展開をみせるか、　なんとなくわかっている。

ずっと毎日何回もそればかり見ているもんな。

アニメ鑑賞以外でも、ネットを使って外部との接触も一応試みている。

もしかしたら、家の近くの地域でオフ会の募集がないか、暇なときは（毎日だが）チェックしている。

しかしそんな誘いなんて１％もないだろう。過去にもそんな書き込みなかったし。

いくらひきこもりでも男なら絶対に女性とはなにかしら接点が持ちたい。

まだ付き合ったことのない人間が　生身の女性に話しかけるなんて難易度高いかもしれないが…。

パソコン越しでは躊躇なくすんなりコミュニケーションがとれる。
顔が割れてないし、目も合わせなくてすむしな。
ただネタがない。会話のネタがほとんどというほど皆無だ。

ひきこもっている俺にとっては世間話一つとっても難易度が高いのだった。

それが原因でチャットでも出会い系でアドレスゲットしてメール交換しても
すぐに淡々と終わってしまう。　長くつづいて5日が限界だろう。

俺から面倒くさくて投げる場合もあるし、向こうから愛想尽かされ自然消滅になってしまうこともある。

まぁそんなこんなで、今の状況を改善するために必要なコミュニケーション手段も
外に出ていろいろ活動や経験をしなかったら、リアルでにっちもさっちもいかない。

だが外に出るのはいやだ。そう視線が…。

とりあえずＹＯＵＴＵＢＥのアニメ鑑賞を終えて、次は２ｃｈを開け、俺と同じ状況下におかれている同報の書き込むをゆったり眺める。

俺よりも人生を（生で）苦労している人たちの書き込みを見ていると、心がスッキリし一時的な安堵感を得るのだ。

まだ俺もいけるぞ。という妄想をしてしまう。

現実はリアルでダメで無様なメンヘラなんだが…。

さて、こうやって　１日中パソコンの前にいるもんだから　２時間置きの休憩が必要になるわけだ。

最近はじめた煙草を一本抜き取りベランダに出て吸い始める。

さすがに部屋の中で吸っていたらタバコ臭くなるし、引っ越すとき余計な金もかかってしまう。

俺の部屋は４階の４０４号室で、今いるベランダのちょうど下の２

０２号室には広めのベランダがある。

ベランダというよりは一種のコンクリート化した庭のようなものだ。

とにかく広め。ちょっと羨ましい。

何か物を落としたら、確実に２０２号室に報告して取りにいかなければならない。

まだ一回も落としたことはないけど…。

このときまでは。

2話　出会い

夕方、煙草を吸おうとして灰皿を持ちベランダから身を乗り出したとき

汗ばんだ手で持ったせいか　つるっと手から離れ、２０２号室のベランダに落ちてしまった。

「しまったぁぁぁ…　あぁ…」

下のベランダを見たらタバコと灰が　無残にも散らばっていた。

俺の顔は青ざめ、固く硬直していた。

手が震えている。

ただでさえ　夜中大声だして近所から精神病者が入居しているというレッテルが貼られているところなのに。

いや、これは絶対貼られている。引っ越してきてから何回も大声で時間を問わず発狂してたもん。

なんでちょうど真下を駐車場かなんかにしないんだよ！　落とした時点でＯＵＴじゃんか！

ヤクザだったらもし物を壊していたら　多額の弁償代を取られてしまう。

下を見たところ　物は壊してないようだ。植木鉢が左側の洗濯機のそばに置いてある。

もしそこの植木鉢があるところに当たってしまったら…。

あぁ！　ここでうだうだいっていても仕方がない。

とりあえず、素直に謝って取ってきてもらおう。

「灰で床が汚れているかもしれないからお金は払わないといけないよな。」

「財布は・・」

炬燵の上に置いてあったくたびれた財布を手に取る

「２０００円しかない。」

こういう焦った状態だったら　無意識ながら口に出てしまうものだ。

「にっ２０００円あったら十分だよな、よし　今から謝りにいこう。」

勇気を振り絞って４日ぶりにアパートの自室を出てエレベーターを降り２階へと到着。

そして２０２号室の前まで来た。

「・・・・・・。」

が、俺はチャイムをなかなか押せなかった。

いや　押すのが怖かった。もし中の人がすごく怖い人だったらどうしよう。

多額の弁償費を払えと言われたらどうしよう…。なにも壊してないけど。

このように、どうしてもネガティブに考えてしまうのだった。

…このままではいけない。けれども怖い。

ここ半年、親以外の人と話したことなんて

コンビニの店員さんが弁当購入のさい、「温めますか？」の言葉に

「はい」と了承と言葉を発する程度しかない。

が、しかし、ここは勇気を振り絞って

「ピンポーン」

とうとうチャイムを押した。

また手が震えている。俺はとっさに手を抑えた。

・・・1分ほど経った。

・・いないのか。

また今度にしようと思い、その場を離れようとしたとき

「ガチャ」

なんと扉が開いた。

「あ・・あ・・・・」

一瞬時間が止まったように思えたのは気のせいではないだろう。

出てきた人は綺麗な美人の女の人だった。

セミロングのヘアスタイル　目が片目髪に隠れる程度に前髪が少し長かった。

まぁそんな印象はどうでもいい。

さぁ　事情の説明だ。

「す…すいません　さっき部屋のベランダからたばこの灰皿を落としたみたいなんで、取りに上がらせてもらってもいいですか？」

…何で今会ったばかりの人様のお家に上がるんだ　この人に取りにいってもらった方がいろいろ楽だろ。

はぁ～　何いってんだよ俺…。

すると　目の前の女の人は　俺の顔を凝視したのち、少し笑みを浮かべながら人差し指を向け俺に話しかけてきた。

「・・・内田君でしょ？」

「え？」

俺はかなり動揺した。なんでこの女の人が俺の名前を知っているんだ。

まさか、急に奇声を発する住人として有名になっていたのだろうか。

「あ・・・　あ・・　あの、ぼっ僕のこと知ってるのですか？」

「えー…　な～に　忘れたの？　うち、長谷川よ。長谷川静香（はせがわしずか）。」

「高校のとき一緒にお昼ご飯食べていたでしょ？」

そう言われ、俺ははっと思いだす。

いた！　そんな人！

たしか高校時代の茶道部の１つ上の先輩で…

頭の中の高校時代の記憶が唐突に蘇る。

――将棋部に一時入部していたときの話――

いつもお昼休憩時に茶道部と将棋部兼用の畳の部屋に仲が良かった友達と食事をしによく行っていた。

将棋部に入部したのも、仲が良かったその友達とつるみたいが故だった。

食事休憩の時間に、その友達を介して茶道部の長谷川さんと出会い、ちょくちょく喋っていた。

俺は彼女のことは別段そんなに意識はしてなかった。ただどうでもいい世間話を少しの間だけ話していただけだ。ただ向こうは俺のことどう思ってたかなんて知るよしもない。

そのときはすぐに将棋部もやめてしまったし。大会でミスを連発し、結果団体戦惨敗。将棋部に俺が入部したことによってかなり迷惑をかけてしまったからな。

そしてその友達、吉田健児(よしだけんじ)君は俺より2つ上の先輩で、現在は僕よりもかなりのメンヘラーだ。

携帯電話は常に切っているし、定期的に会おうと家電で誘うも、理由をつけて常に断っている。

まさに典型的な鬱病だ。彼は大学入学して3年後にこうなってしまったから丁度その時期に心が病んでしまったのであろう。

今は2年あまりずっと家の自室でひきこもっているそうだ。俺と似たようなものだがタイプが違うんだこれが。

原因はともかく、彼の方が俺なんかよりもっともらしい心の病気で、俺はただの甘え。ただ心が狭く臆病なだけ。

そんなわけで

――回想終わり――

今はこんなことをほのぼのと思いだしている場合じゃない。

久し振りに高校時代の知り合いに奇跡的に会えたのだから。何か喋らないと…。

「あー・・　はっ長谷川さん、久し振りですね。」

女性…　しかも年が近い人とまともに口を聞いたことなんて何年ぶりだろう。

こういうとき、人と話してないと、リアルで挙動不審になってしまう。

俺は焦る表情や態度を素に戻そうと必死だった。

なにか話さないと気まずい。それに本題もあるし。

「あの…今、何のお仕事なされているのですか？　大学はもう卒業

しましたよね。」

「あーうん…。今うち主婦やってんの」

は！？　主婦？

つーことは既婚者か。旦那さんはいるのか。

この人は今俺より1個上だから23歳。

まぁ…　女性なら別に早すぎるということはないだろう。

「…そうなんですか。あれから何年も経ってるわけだからいろいろありますよね　アハハハ…」

笑い方が不自然すぎる。

「うん、内田君は何のお仕事してるの？　アパートに住んでるわけだしこの近くに職場があるんだよね。」

「近くていいなー」

しまった！　なんで仕事のことを口に出してしまったんだ。こうなることを予想できたはず！

ここをどう切り抜ける！？

嘘をつくか　思い切って本当のことを…。

えいい、考えている時間はない。

「お仕事はフリーターで、今マクドの定員をしているんですよ。ほら、駅の隣にあるあそこです。」

嘘ついちゃった…。ええい　どうにでもなれ。

「内田君フリーターなんだ。でも働いているってえらいね～。　うち専業主婦だから社会に出てなくて。」

働いてません。ニート・ひきこもりです。立場的にあなたより圧倒的に下です。はい。

長谷川さんは会話をつづけた。

「ねぇ　マックって今１００円キャッシュバックされてるんだよね？　それってどの種類でもＯＫなの？　あとテリヤキチキンバーガ今いくらだっけ？　あれ好きなんだけどあまりマックに行ってない

から教えて？」

キタ！　嘘は最終的にバレてしまう法則が。

そんなこと、ひきこもりの俺に応えられるはずもない。無理やり話題の進路変更だ。

「そ…　そんなことより、さっきベランダでカンカンの灰皿落としちゃって…　あの、拾わせてもらっていいですか？」

「あ…　うん。」

なぜか彼女は下を向いて力なく声を出した。　そして顔を上げて

「いいよ、入らなくても。　うちが取ってくるね。ちょっと待ってて！」

だろうな。わざわざ俺が踏み入ることもない。灰で汚れたベランダを掃除するくらいだ。

「はい、この灰皿だね。」

「ありがとうございます。」

俺は灰皿を見事他人のベランダから奪還した。ひきこもりの身分からしてみたらそうとう達成感がある。

そして、高校時代の知り合いの女性にも会えた。

今日は少しだけ気持ち良く寝れそうだ。

3話　愛情の裏側に（前書き）

番外編のようですが、前話のつづきです。

3話　愛情の裏側に

僕の名前は工藤卓弥（くどうたくや）。現在２８歳。

二流大学を卒業後、二流企業に就いた。

毎日毎日、夜の１０時まで残業し、朝は８時に出勤している超頑張り屋さんだ。

まさに働きマン。

しかし残念なことに５年勤続していても、出世するメドは一向に立たずほとほと疲れ果ててしまい精神は病んでいく一方だった。

そんな僕をいつも励ましてくれた同僚の女性がいた。

彼女の名前は「長谷川静香。」

時の成り行きでいつのまにか付き合う関係になり、デートも日々積み重ねた。

「ずっと幸せにしてあげるからね。」

そう彼女に告げ、付き合って１年後　早くも結婚にありつけた。

ただ、なんでだろう…。結婚し一緒に同棲しているにも関わらず、彼女は僕のことを完璧に信頼していないようだった。

愛すれば愛するほど、彼女は離れていくような感じだ。

僕の何がダメなんだろう。

もっと束縛して欲しかったりするのだろうか。

過去のデートでは君が喜ぶことばかりしてきた。

休日は映画を観に行った　ボーリングにも連れて行った。

夜には食事にも連れて行った。

そして、海外旅行にも連れて行った。

お金は僕がいつも出していた。彼女は嫌がったが僕は君に喜ぶことをするのが楽しみであり生きがいでもあったのだ。

付き合ってからずっと　君ばかり見てきた。

しかし君は僕がなにをしても、定員が客に対して使うありきたりな礼儀正しい言葉使いばかりだ。

そんなことじゃ刺激がとても足りない。まさに他人と接している気分だ。

もっと俺を怒ってくれ　なんでもいい。

仕事から遅れてきたら理由を問いただしたり

嬉しそうにメールをうっていたら　女性だと疑って聞いてみたり

いじわるしてみたり

からかってみたり

なんでもいい。

俺は…

彼女を手放したくない。

もっと俺を見てほしい。

愛してほしい。

言葉なんかじゃわからない。

態度で示して　抱きしめて　奉仕をしてほしい。

もっと　もっと　もっと

僕は君を唯一理解している人なんだ。

もう少し日が経てば、君は変わってくれるだろうか。

変わってくれなかったら…　僕は一体どういう行動に出るだろうか…。

ある日、静香は僕に相談することもなく、突然仕事を辞めていた。

そして僕は静香に理由を問いただした。

「疲れた　ゆっくり休ませて」

そう彼女は告げた。僕は深く問いつめるのをやめた。

静香を傷付けてしまう恐れがあるかもしれない。

嫌われたくないが故に何も問わなかった。

「そうか、ゆっくり休んだ方がいい」

静香が仕事を辞めてから一ヶ月が経っても社会に復帰する傾向は一切ないままだ。

そしてある日、静香はリストカットしているところを偶然目撃した。

僕は気が狂いそうだった。なんでそんなことをするのか。

当然怒った。が、「あなたには関係ないでしょ」だけ言い残し　すぐに家を飛び出してしまったのだ。

焦った僕は懸命ながら説得し、家に戻ってきてくれたものの、現状はさして変わらない。

またある日、どうしていいか分からず突然自暴自棄になり　彼女を思いっきり殴った。

殴った。　殴った。　殴った。

最初は愛情の鞭という感覚で殴っていたが、脳の裏に潜んでいた悪魔が目覚めてしまった。

不思議なことに殴っている間は　意外にも快感に近い、スッキリとした感情になれてしまったのだ。

彼女を殴ることに快楽を得てしまった。

そしてこの日から妻への強烈な束縛をついに実行に移した。

普段はちゃんと人間らしく、夫らしく妻と接し

彼女がリストカットしたり、僕の指示に従わなかったり、罵倒を口

にしたら容赦なく殴りつけた。

最悪なことに暴力癖は改善されず、日が経つにつれて暴力は徐々にエスカレートしていった。

彼女が僕のことをどう思っているなんてもはや関係ない。

簡単に説明すると僕の暴力は麻薬をうって一時的な快楽状態になっているような感じだ。

どうせ僕のことなんてなんとも思ってないし、どうせ愛情の欠片もない。結婚する前の静香は消え失せた。

ただ人生のイベントの1つとして結婚し一緒に側にいてやってやる。感謝しろ。

始めからきっとそう思っていたに違いない。

そしていつのまにか僕が最も嫌っていた、してはならない暴力夫になってしまった。

静香は僕が怒り狂って殴っているときに　これだけは大声でこう言っていた。

「ごめんなさい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6301g/

もどかしい世界の上で

2010年10月21日22時24分発行